

事務連絡
令和8年3月27日

各（都道府県
市町村
特別区）衛生主管部（局） 御中

厚生労働省健康・生活衛生局感染症対策部予防接種課

HPVワクチンに関するリーフレットの改訂等について

予防接種行政については、日頃より御理解と御協力を賜り厚く御礼申し上げます。
組換え沈降2価及び4価ヒトパピローマウイルス様粒子ワクチン（以下「2価及び4価HPVワクチン」という。）については、第64回厚生科学審議会予防接種・ワクチン分科会において令和8年度からのヒトパピローマウイルス感染症に対する定期接種に用いるワクチンから除かれることが了承され、関係法令の必要な手続きを進めております。

これを踏まえ、今般、別添のとおりHPVワクチンに関するリーフレットの改訂（2価及び4価HPVワクチンに関する情報の削除、子宮頸がんの罹患率・死亡数などHPVワクチンに関連する最新の知見やデータの更新）をいたしました。

つきましては、令和8年度からのヒトパピローマウイルス感染症に係る定期接種に関する接種対象者及び保護者等（以下「接種対象者等」という。）への情報提供に当たっては、改訂したリーフレット又は同様の趣旨の情報提供資材を適宜活用いただきますようお願いいたします。

併せて、HPVワクチンに関する情報をよりわかりやすくお伝えするために、まんが広告を中高生向けの新聞に掲載いたしましたので、当該広告媒体についても適宜ご活用ください。

引き続き、接種対象者等が正しい情報に基づいて接種の検討・判断が行えるよう、周知・広報に取り組んでいただきますようお願いいたします。

なお、公益社団法人日本医師会に対し、本件に係る周知協力を依頼していることを申し添えます。

（資材については、厚生労働省ホームページからダウンロードいただけます）

資材1～資材3：<https://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/kenkou/kekkaku-kansenshou19/leaflet.html>

資材4～資材5：<https://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/kenkou/kekkaku-kansenshou19/kouhou.html>

【リーフレット・広告（2026年2月作成、更新）】

- 資料1 HPVワクチン接種の対象年齢のお子様及びその保護者向けリーフレット（概要版）
- 資料2 HPVワクチン接種の対象年齢のお子様及びその保護者向けリーフレット（詳細版）
- 資料3 HPVワクチンの接種に関する医療従事者向けリーフレット
- 資料4 中高生向け新聞掲載まんが広告（第1弾）
- 資料5 中高生向け新聞掲載まんが広告（第2弾）
- 資料6 中高生向け新聞掲載まんが広告（第3弾）

（参考）

- ・ 審議会において自治体の取組を紹介（資料3-2スライド13~14及び資料3-3）
第73回厚生科学審議会予防接種・ワクチン分科会予防接種基本方針部会：
資料3-2：HPVワクチンの周知広報について（スライド13~14）
<https://www.mhlw.go.jp/content/10900000/001597724.pdf>
資料3-3：宮崎市におけるHPVワクチンの周知等の取組について
<https://www.mhlw.go.jp/content/10900000/001597725.pdf>

2026年2月改訂版

がい よう ばん
概要版

詳しく知りたい方向けの詳細版もあります。

小学校6年 ~ **高校1年^{相当}** の女の子と
保護者の方へ大切なお知らせ



HPVワクチンについて知ってください
～あなたと関係のある“がん”があります～

ウイルス感染でおこる子宮けいがん

詳細版
P2~3

「がんってたばこでなるんでしょ？」

「オトナがなるものだから私は関係ない」って思っていないですか？

実はウイルスの感染がきっかけでおこる“がん”もあります。その1つが子宮けいがんです。

HPV(ヒトパピローマウイルス)の感染が原因と考えられています。

このウイルスは、女性の多くが“一生に一度は感染する”といわれるウイルスです※。

感染するとほとんどの人は時間がたつと検査では見つからなくなりますが、一部の人でがんになってしまうことがあります。

現在、感染した後にどのような人ががんになるのかわかっていないため、感染を防ぐことががんにならないための手段です。

※HPVは一度でも性的接触せいしよくの経験があればだれでも感染する可能性があります。



女性の多くがHPV(ヒトパピローマウイルス)に
“一生に一度は感染する”といわれる

がんになる場合も

感染を防ぐことが
がんにならないための手段

<何人くらいが子宮けいがんになるの？>

日本では毎年、約1.1万人の女性が子宮けいがんになり、毎年、約3,000人の女性が亡くなっています。患者さんは20歳代から増え始めて、30歳代までにがんの治療で子宮を失ってしまう(妊娠できなくなってしまう)人も、1年間に約900人います。

<一生のうち子宮けいがんになる人>

1万人あたり130人

2クラスに1人くらい

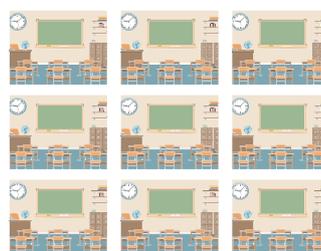


1クラス約35人の女子クラスとして換算

<子宮けいがんて亡くなる人>

1万人あたり31人

9クラスに1人くらい



HPVワクチンの効果 詳細版 P4

HPVの中には子宮けいがんをおこしやすい種類(型)のものがあります。
HPVワクチンは、このうち一部の感染を防ぐことができます。
現在日本において公費で受けられるワクチンは、9価ワクチン(シルガード®9)です。
子宮けいがんをおこしやすい種類であるHPV16型と18型の感染を防ぎ、
ほかの5種類*1のHPVの感染も防ぐため、子宮けいがんの原因の80~90%を防ぎます*2。
また、HPVワクチンでがんになる手前の状態(前がん病変)が減るとともに、
がんそのものを予防する効果があることもわかってきています。

*1 HPV31型、33型、45型、52型、58型
*2 HPV16型と18型、31型、33型、45型、52型、58型まで含めると、子宮けいがんの原因の80~90%を占めます。

HPVワクチンのリスク 詳細版 P5

筋肉注射という方法で注射します。接種を受けた部分の痛みや腫れ、赤みなどの症状が起こることがあります。
頻度は不明ですが、重い副反応(アナフィラキシー、ギラン・バレー症候群、急性散在性脳脊髄炎(ADEM)、
免疫性血小板減少症)*1が起こることがあります。
また、広い範囲の痛み、手足の動かしにくさ、不随意運動*2といった多様な症状が報告されています。
ワクチンが原因となったものかどうかわからないものをふくめて、
接種後に重篤な症状*3として報告があったのは、ワクチンを受けた1万人あたり約2人です。
接種する年齢によって、合計2回または3回接種しますが、
接種した際に気になる症状が現れたら、それ以降の接種をやめることができます。
接種後に気になる症状が出たときは、まずはお医者さんや周りの大人に相談してください*4。

*1 アナフィラキシー:呼吸困難、じんましん等、ギラン・バレー症候群:手足の力が入りにくい等、急性散在性脳正規髄炎(ADEM):頭痛、嘔吐、意識低下等、免疫性血小板減少症:紫斑、鼻出血、口腔粘膜出血等
*2 動かそうと思っていないのに体の一部が勝手に動いてしまうこと
*3 重篤な症状には、入院相当以上の症状などがふくまれています。報告した医師や企業の判断によるため、必ずしも重篤でないものも重篤として報告されることがあります。
*4 HPVワクチン接種後に生じた症状の診療を行う協力医療機関をお住まいの都道府県ごとに設置しています。

子宮けいがんで苦しまないために、できることが2つあります 詳細版 P7

① 今からできること

日本では、小学校6年~高校1年相当の女の子を対象に、
子宮けいがんの原因となるHPVの感染を防ぐ
ワクチンの接種を提供しています。

HPVの感染を防ぐことで、
将来の子宮けいがんを予防できると
期待されています。

カナダ、オーストラリアなどでは
女の子の8割以上がワクチンを受けています。



② 20歳になったらできること

HPVワクチンを
受けていても、
子宮けいがん検診は
必要です。
定期的に
検診を受けることが
大切です。



HPVワクチンについて知ってください

すべてのワクチンの接種には、効果とリスクとがあります。
まずは、子宮けいがんとHPVワクチン、子宮けいがん^{がん}検診^{けんしん}について知ってください。
周りの人とお話ししてみたり、かかりつけ医などに相談することもできます。

HPVワクチンを受けることを希望する場合は

詳細版
P4,8

小学校6年～高校1年相当の女の子は、HPVワクチンを公費で受けられます*。
ワクチンを接種する年齢によって、接種の回数や間隔が異なりますが、
半年～1年の間に決められた回数、接種します。
接種には、保護者の方の同意が必要です。

*公費の補助がない場合の接種費用は3回接種で8～10万円、2回接種で5～7万円です。



1年以内に接種を終えることが望ましいとされています。

※1 1回目と2回目の接種は、少なくとも5か月以上あけます。5か月未満である場合、3回目の接種が必要になります。

※2・3 2回目と3回目の接種がそれぞれ1回目の2か月後と6か月後にできない場合、2回目は1回目から1か月以上(※2)、3回目は2回目から3か月以上(※3)あけます。

HPVワクチンについて、もっと詳しく知りたい方は

このご案内の内容をもっと詳しく説明している
「HPVワクチンについて知ってください<詳細版>」や、
其他のご案内をご覧ください。

厚労省 HPV



HPVワクチンに関するよくあるご質問(Q&A)については、こちらをご確認ください。

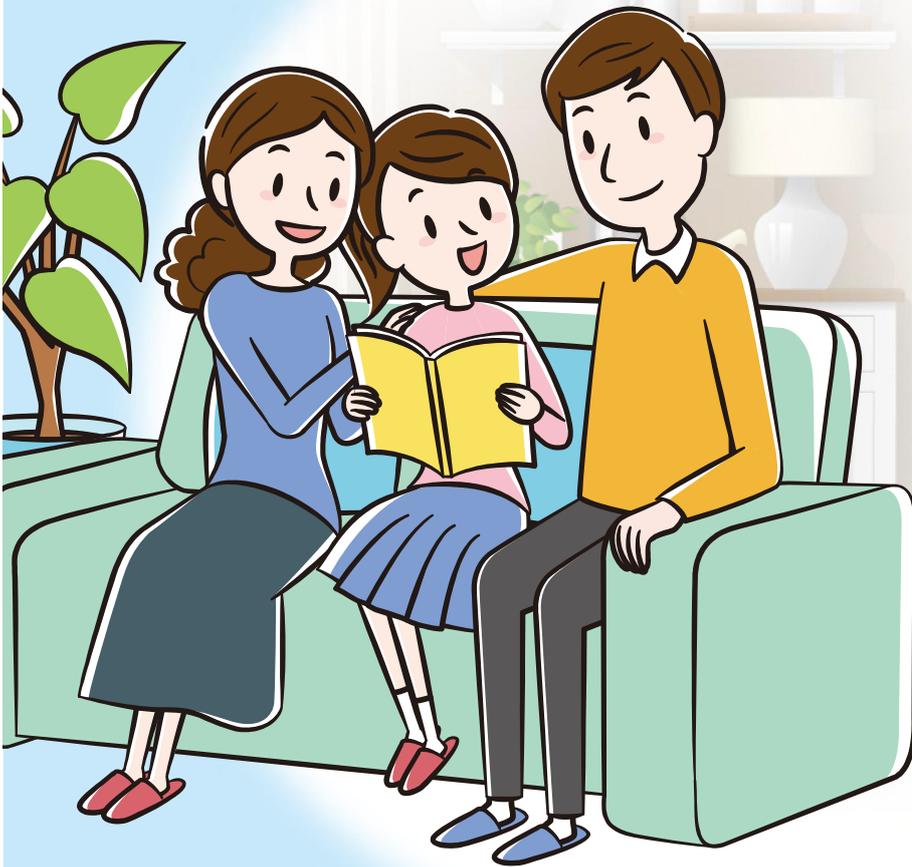


お問合せ先

しょうさいばん
詳細版

お子様にもわかりやすい概要版もあります。

小学校6年 ~ **高校1年^{相当}** の女の子と
保護者の方へ大切なお知らせ



目次

・子宮頸がんの現状	2
・子宮頸がんにかかる仕組み	3
・子宮頸がんの治療	3
・HPVワクチンの接種について	4
・HPVワクチンの効果	4
・HPVワクチンのリスク	5
・安全性を定期的に確認しています	6
・予防接種健康被害救済制度について	6
・HPVワクチン接種の注意点	6
・HPVワクチンのはじまりと世界での状況	7
・HPVワクチンと子宮頸がん検診	7
・子宮頸がん検診について	7
・HPVワクチンについて知ってください	8

HPVワクチンについて知ってください
～あなたと関係のある“がん”があります～

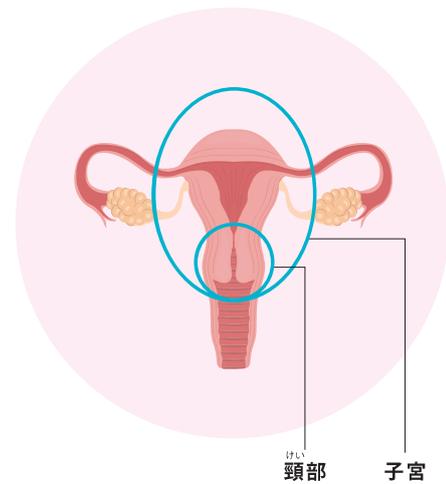
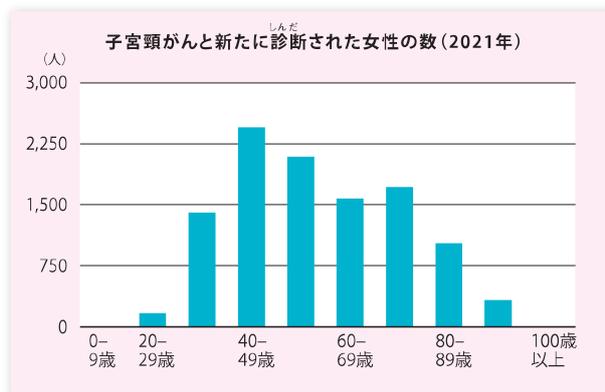
子宮頸がんの現状

子宮頸がんは、子宮の頸部という子宮の出口に近い部分にできるがんです。

子宮頸がんは、若い世代の女性のがんの中で多くを占めるがんです。

日本では毎年、約1.1万人の女性がかかる病気で、さらに毎年、約3,000人の女性が亡くなっています。

患者さんは20歳代から増え始めて、30歳代までにがんの治療で子宮を失ってしまう(妊娠できなくなってしまう)人も、1年間に約900人います。

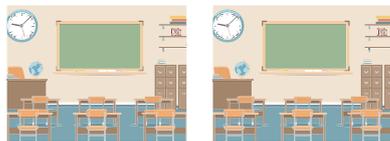


<一生のうち子宮頸がんになる人>

1万人あたり130人

つまりこれってどのくらい?

2クラスに1人くらい

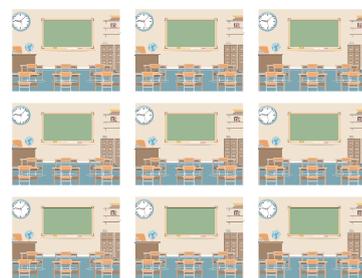


1クラス約35人の女子クラスとして換算

<子宮頸がんで亡くなる人>

1万人あたり31人

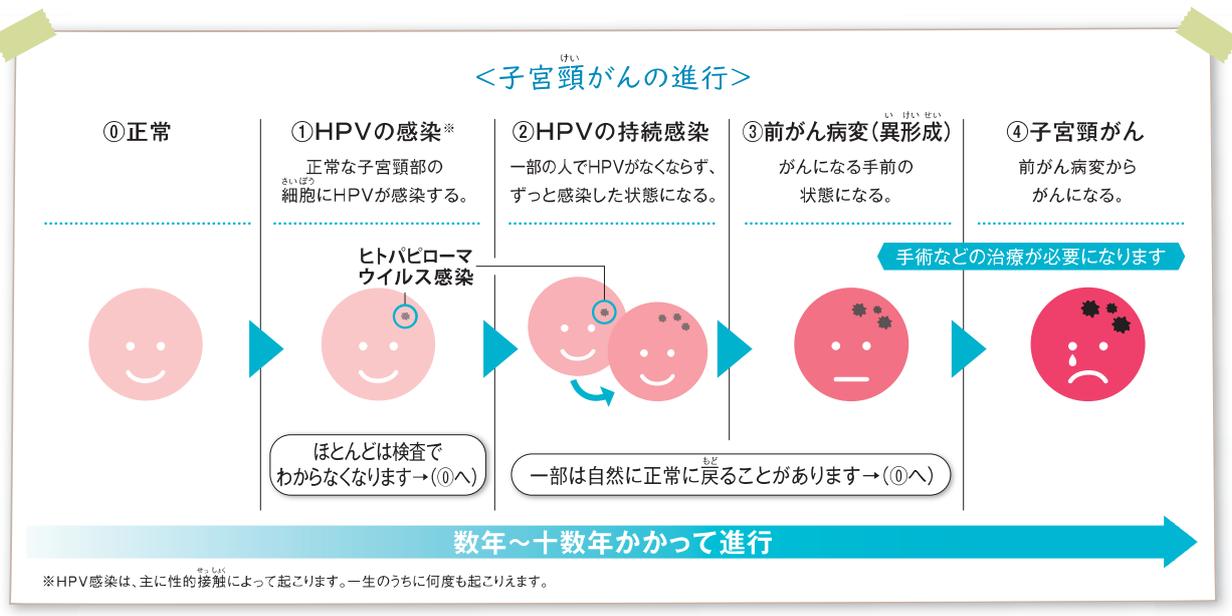
9クラスに1人くらい



子宮頸がんにかかる仕組み

子宮頸がんの原因は、長らく明らかになっていませんでしたが、1982年、ドイツのハラルド・ツァ・ハウゼン氏により、子宮頸がんのほとんどがヒトパピローマウイルス(HPV)というウイルスの感染で生じることが発見されました。同氏は、この功績により2008年ノーベル医学生理学賞を授与されました。

HPVには200種類以上のタイプ(遺伝子型)があり、子宮頸がんの原因となるタイプが少なくとも15種類あることがわかっています。HPVに感染しても、すぐにがんになるわけではなく、いくつかの段階があります。



HPVは、女性の多くが“一生に一度は感染する”といわれるウイルスです。感染しても、ほとんどの人では時間が経つと検査ではわからないほどになりますが、一部の人でがんになってしまうことがあります。現在、感染した後にどのような人ががんになるのかわかっていないため、感染を防ぐことががんにならないための手段です。

子宮頸がんの治療

子宮頸がんは、早期に発見し手術等の治療を受ければ、多くの場合、命を落とさず治すことができる病気です。

進んだ前がん病変(異形成)や子宮頸がんの段階で見つかると、手術が必要になります。病状によって手術の方法は異なりますが、子宮の一部を切り取ることで、妊娠したときに早産のリスクが高まったり、子宮を失うことで妊娠できなくなったりすることがあります。



女性の多くがHPV(ヒトパピローマウイルス)に“一生に一度は感染する”といわれる

がんになる場合も

感染を防ぐことががんにならないための手段

HPVワクチンの接種について

日本では、小学校6年～高校1年相当の女の子を対象に、子宮頸がんの原因となるHPVの感染を防ぐワクチン(HPVワクチン)の接種を提供しています。対象者は公費により接種を受けることができます。

HPVワクチンは、一定の間隔をあけて、合計2回または3回接種します。接種する年齢によって、接種のタイミングや回数が異なります。



1年以内に接種を終えることが望ましいとされています。

※1 1回目と2回目の接種は、少なくとも5か月以上あけます。5か月未満である場合、3回目の接種が必要になります。

※2・3 2回目と3回目の接種がそれぞれ1回目の2か月後と6か月後にできない場合、2回目は1回目から1か月以上(※2)、3回目は2回目から3か月以上(※3)あけます。

HPVワクチンの効果

HPVの中には子宮頸がんをおこしやすい種類(型)のものがああります。

現在日本において公費で受けられるワクチンは、9価ワクチン(シルガード®9)です。

子宮頸がんをおこしやすいHPV16型と18型に加え、ほかの5種類※1のHPVの感染も防ぐため、

子宮頸がんの原因の80～90%を防ぎます※2。

※1 HPV31型、33型、45型、52型、58型

※2 HPV31型、33型、45型、52型、58型まで含めると、子宮頸がんの原因の80～90%を占めます。

HPVワクチンの接種により、感染予防効果を示す抗体は少なくとも12年維持される可能性があることが、これまでの研究でわかっています※4。

※4 ワクチンの誕生(2006年)以降、期待される効果について研究が続けられています。

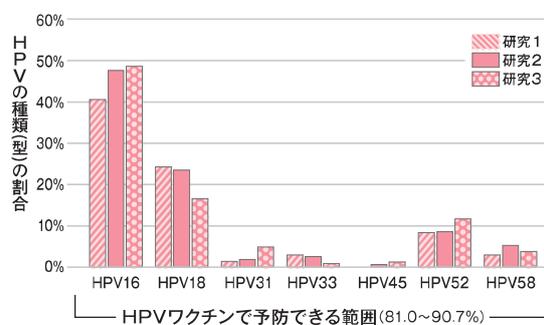
HPVワクチンでがんになる手前の状態(前がん病変)が減るとともに、がんそのものを予防する効果があることもわかってきています。

HPVワクチンの接種を1万人が受けると、受けなければ子宮頸がんになっていた約70人※5ががんにならなくてすみ、約20人※6の命が助かる、と試算されています。

※5 59～86人

※6 14～21人

<日本人女性の子宮頸がんにおけるHPVの種類(型)の割合と、ワクチンで予防できる範囲>



「9価ヒトパピローマウイルス(HPV)ワクチン ファクトシート」(国立感染症研究所)をもとに作成
 研究1: Onuki, M., et al. (2009). Cancer Sci 100(7): 1312-1316.
 研究2: Azuma, Y., et al. (2014). Jpn J Clin Oncol 44(10): 910-917.
 研究3: Sakamoto, J., et al. (2018). Papillomavirus Res 6: 46-51.

HPVワクチンのリスク

HPVワクチン接種後には、接種部位の痛みや腫れ、赤みなどが起こることがあります。

頻度は不明ですが、重い副反応（アナフィラキシー、ギラン・バレー症候群、急性散在性脳脊髄炎（ADEM）、免疫性血小板減少症）※1が起こることがあります。

発生頻度	9価ワクチン（シルガード®9）
50%以上	疼痛*
10~50%未満	腫脹*、紅斑*、頭痛
1~10%未満	浮動性めまい、悪心、下痢、そう痒感*、発熱、疲労、内出血*など
1%未満	嘔吐、腹痛、筋肉痛、関節痛、出血*、血腫*、倦怠感、硬結*など
頻度不明	感覚鈍麻、失神、四肢痛など

シルガード®9添付文書（第3版）より改編

*接種した部位の症状

因果関係があるかどうかわからないものや、接種後短期間で回復した症状をふくめて、HPVワクチン接種後に生じた症状として報告があったのは、接種1万人あたり約4人です。このうち、報告した医師や企業が重篤と判断した人は接種1万人あたり約2人です。※2、※3

- ※1 アナフィラキシー：呼吸困難、じんましん等、ギラン・バレー症候群：手足の力が入りにくい等、急性散在性脳脊髄炎（ADEM）：頭痛、嘔吐、意識低下等、免疫性血小板減少症：紫斑、鼻出血、口腔粘膜出血等
- ※2 2025年度まで定期接種に用いていた2価または4価ワクチン（サーバリックス®またはガーダシル®）は1万人あたり約9人です。このうち報告した医師や企業が重篤と判断した人は、接種1万人あたり約5人です。
- ※3 HPVワクチン接種後に生じた症状として報告があった数（副反応疑い報告制度における報告数）は、企業からの報告では販売開始から、医療機関からの報告では平成22（2010）年11月26日から、令和6（2024）年9月末時点までの報告の合計。出荷数量より推計した接種者数（サーバリックス®およびガーダシル®は422万人、シルガード®9は177.2万人）を分母として1万人あたりの頻度を算出。
- ※4 重篤な症状には、入院相当以上の症状などがふくまれていますが、報告した医師や企業の判断によるため、必ずしも重篤でないものも重篤として報告されることがあります。

〈 HPVワクチン接種後に生じた症状の報告頻度 〉

1万人あたり約4人 ※1

※1 2025年度まで定期接種で用いていたサーバリックス®またはガーダシル®1万人あたり約9人



〈 HPVワクチン接種後に生じた症状（重篤）の報告頻度 〉

1万人あたり約2人 ※2

※2 2025年度まで定期接種で用いていたサーバリックス®またはガーダシル®1万人あたり約5人

〈痛みやしびれ、動かしにくさ、不随意運動について〉

- ワクチンの接種を受けた後に、広い範囲に広がる痛みや、手足の動かしにくさ、不随意運動（動かそうと思っていないのに体の一部が勝手に動いてしまうこと）などを中心とする多様な症状が起きたことが報告されています。
- この症状は専門家によれば「機能的な身体症状」（何らかの身体症状はあるものの、画像検査や血液検査を受けた結果、その身体症状に合致する異常所見が見つからない状態）であると考えられています。
- 症状としては、①知覚に関する症状（頭や腰、関節等の痛み、感覚が鈍い、しびれる、光に対する過敏など）、②運動に関する症状（脱力、歩行困難、不随意運動など）、③自律神経等に関する症状（倦怠感、めまい、睡眠障害、月経異常など）、④認知機能に関する症状（記憶障害、学習意欲の低下、計算障害、集中力の低下など）などいろいろな症状が報告されています。
- 「HPVワクチン接種後の局所の疼痛や不安等が機能的な身体症状をおこすきっかけとなったことは否定できないが、接種後1か月以上経過してから発症している人は、接種との因果関係を疑う根拠に乏しい」と専門家によって評価されています。
- また、同年代のHPVワクチン接種歴のない方においても、HPVワクチン接種後に報告されている症状と同様の「多様な症状」を有する方が一定数存在することが明らかとなっています。
- このような「多様な症状」の報告を受け、様々な調査研究が行われていますが、「ワクチン接種との因果関係がある」という証明はされていません。
- ワクチンの接種を受けた後や、けがの後などに原因不明の痛みが続いたことがある方は、これらの状態が起きる可能性が高いと考えられているため、接種については医師とよく相談してください。

安全性を定期的に確認しています

接種が原因と証明されていなくても、
接種後に起こった健康状態の異常について報告された場合は、
審議会(ワクチンに関する専門家の会議)*において一定期間ごとに、
報告された症状をもとに、
ワクチンの安全性を継続して確認しています。

*厚生科学審議会予防接種・ワクチン分科会副反応検討部会 等



予防接種健康被害救済制度について

極めてまれですが、予防接種を受けた方に重い健康被害を生じる場合があります。

HPVワクチンに限らず、日本で承認されているすべてのワクチンについて、ワクチン接種によって、
医療機関での治療が必要になったり、生活に支障が出るような障害が残るなどの健康被害が生じた場合は、
法律に基づく救済(医療費・障害年金等の給付)が受けられます。

その際、「厳密な医学的な因果関係までは必要とせず、
接種後の症状が予防接種によって起こることを否定できない場合も救済の対象とする」という
日本の従来からの救済制度の基本的な考え方にそって、救済の審査を実施しています。
令和7(2025)年3月末までに救済制度の対象となった方*1は、審査された636人中、384人*2です。

予防接種による健康被害についてのご相談は、お住まいの市町村の予防接種担当部門にお問い合わせください。

*1 ワクチン接種に伴って一般的に起こりえる過敏症など機能性身体症状以外の認定者もふくんだ人数

*2 予防接種法に基づく救済の対象者については、審査した計96人中、63人

独立行政法人医薬品医療機器総合機構法(PMDA法)に基づく救済の対象者については、審査した計540人中、321人です。

HPVワクチン接種の注意点

- 筋肉注射という方法で接種しますが、注射針を刺した直後から、
強い痛みやしびれを感じた場合はすぐに医師にお伝えください。
- 痛みや緊張等によって接種直後に一時的に失神や立ちくらみ等が生じることがあります。
接種後30分程度は安静にしてください。
- 接種を受けた日は、はげしい運動は控えましょう。
- 接種後に体調の変化が現れたら、まずは接種を行った医療機関などの医師にご相談ください。
HPVワクチン接種後に生じた症状の診療を行う協力医療機関をお住まいの都道府県ごとに設置しています。
協力医療機関の受診は、接種を行った医師またはかかりつけの医師にご相談ください。
- HPVワクチンは、合計2回または3回接種しますが、接種した際に気になる症状が現れた場合は、
それ以降の接種をやめることができます。



HPVワクチンのはじまりと世界での状況

HPVワクチンは、2006年に欧米で生まれ、使われ始めました。
日本では、2009年10月にワクチンとして承認され、接種が始まりました。

世界保健機関(WHO)が接種を推奨しており、
2025年2月時点ではWHO加盟国194か国のうち
148か国で公的な予防接種が行われています。
カナダ、オーストラリアなどの接種率は8割以上です(※)。

日本での接種者は近年徐々に増えています。
日本の最新の接種状況は厚生労働省ホームページからご確認いただけます。

厚生労働省「定期の予防接種実施者数」 <https://www.mhlw.go.jp/topics/bcg/other/5.html> →

<HPVワクチンを接種した
女の子の割合(2024年)>

アメリカ	77.0%
カナダ	86.0%
イギリス	74.1%
イタリア	66.3%
ドイツ	68.1%
フランス	48.0%
オーストラリア	83.4%

※出典: WHO HPV vaccination coverage



140か国以上で
公的接種

カナダ、オーストラリアなどでは
接種率8割以上

日本での接種率は
徐々に上昇中

HPVワクチンと子宮頸がん検診

子宮頸がんで苦しまないために、私たちがができることは、
HPVワクチンの接種と子宮頸がん検診の受診の2つです。

ポイント

1

HPVワクチンで
HPVの感染を予防



ポイント

2

子宮頸がん検診で
がんを早く見つけて治療

なるほど!



子宮頸がん検診について

20歳になったら、子宮頸がんを早期発見するため、
子宮頸がん検診を定期的に受けることが重要です*。

※HPVワクチンで防げない種類(型)のHPVもあります。

子宮頸がん検診では、前がん病変(異形成)や
子宮頸がんがないかを検査します。

継続して安心!



ワクチンを接種していても、していなくても、20歳になったら
必ず、定期的に子宮頸がん検診を受けてください。

HPVワクチンについて知ってください

すべてのワクチンの接種には、効果とリスクとがあります。
まずは、子宮頸がん^{けいがん}とHPVワクチン、子宮頸がん^{けいがん}検診^{けんしん}について知ってください。
周りの人とお話ししてみたり、かかりつけ医などに相談することもできます。



HPVワクチンに関する相談先一覧

接種後に、健康に異常があるとき

→ 接種を行った医師・かかりつけの医師、HPVワクチン接種後に生じた症状の診療に関する協力医療機関
※協力医療機関の受診については、接種を行った医師またはかかりつけの医師にご相談ください

不安や疑問があるとき、日常生活や学校生活で困ったことがあるとき

→ お住まいの都道府県に設置された相談窓口(衛生部局、教育部局)

HPVワクチンを含む予防接種、インフルエンザ、性感染症、その他感染症全般についての相談

→ 厚生労働省 感染症・予防接種相談窓口

予防接種による健康被害救済に関する相談や、どこに相談したらよいかわからないとき

→ お住まいの市町村の予防接種担当部門

厚生労働省のホームページでは、
HPVワクチンに関する情報をご案内しています。

厚労省 HPV

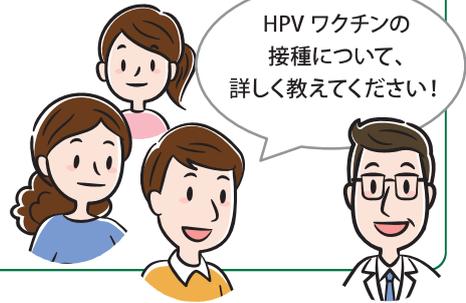


HPVワクチンに関するよくあるご質問(Q&A)については、こちらをご確認ください。



お問合せ先

- HPV ワクチンは、平成 22 (2010) 年 11 月から子宮頸がん等ワクチン接種緊急促進事業として接種が行われ、平成 25 (2013) 年 4 月に予防接種法に基づく定期接種に位置づけられました。平成 25 (2013) 年 6 月から、積極的な勧奨（個別に接種を勧める内容の文書をお送りすること）を一時的に差し控えていましたが、令和 3 (2021) 年 11 月に、専門家の評価により「HPV ワクチンの積極的勧奨を差し控えている状態を終了させることが妥当」とされ、令和 4 年 4 月から、他の定期接種と同様に、個別の勧奨を行っております。
- HPV ワクチンに関する知識がない方、接種すべきか判断できずに困っている方、接種に不安を抱いている方などが多くおられます。そのような方々に、適切な情報提供をお願いしたいと考えています。
- ワクチンの接種に当たっては、被接種者・保護者に HPV ワクチンの有効性・安全性に関する十分な情報提供・コミュニケーションをはかった上で実施してください。なお、その場合は被接種者とその保護者の不安にも十分配慮ください。



① ヒトパピローマウイルス (HPV) と子宮頸がん

- **子宮頸がんについては、HPVが持続的に感染することで、異形成を生じた後、浸潤がんに至ることが明らかになっています。** HPVに感染した個人に着目した場合、多くの感染者で数年以内にウイルスが消失しますが、そのうち数%は持続感染→前がん病変(高度異形成、上皮内がん)のプロセスに移行し、さらにその一部は浸潤がんに至ります。
- 性交経験のある人の多くは、HPVに一生に1度は感染すると言われていて、日本においては、**ほぼ100%の子宮頸がん**で**高リスク型HPVが検出され**、その中でも**HPV16/18型が50～70%、HPV31/33/45/52/58型を含めると80～90%を占めます。**
- 日本では、子宮頸がんの**罹患者は年間約1.1万人**、それによる**死亡者は約3,000人**になるなど、重大な疾患となっています。子宮頸がん年齢階級別罹患率は20代から上昇し、40代でピークを迎えます。
- 子宮頸がん自体は、早期に発見されれば予後の悪いがんではありませんが、妊孕性を失う手術や放射線治療を要する20代・30代の方が、年間約900人います。また、前がん病変に対して行われた円錐切除術の件数は年間1.3万件を超えています。円錐切除術後は、流産産のリスクが高まると言われています。

② HPVワクチンの効果(有効性) 詳しくはこちらへ

<https://www.mhlw.go.jp/content/000892337.pdf>



- HPVワクチンは2006年に欧米で使われ始めた比較的新しいワクチンであり、海外や日本で行われた疫学調査では、HPVワクチンを導入することにより、子宮頸がんの前がん病変(がんになる手前の状態)を予防する効果が示されています。また、接種が進んでいる一部の国では、**子宮頸がんそのものを予防する効果がある**こともわかってきています。
- 公費で接種できるHPVワクチンは9価HPVワクチン(シルガード®9)です。
 - **9価HPVワクチン(シルガード®9)**
HPV16/18/31/33/45/52/58型の感染とそれによる子宮頸部異形成を予防するとともに、HPV6/11型の感染とそれによる尖圭コンジローマも予防することが示されています。
(2025年度まで以下のワクチンが定期接種に位置付けられていました。)
 - **2価HPVワクチン(サーバリックス®)**
HPV16/18型の感染とそれによる子宮頸部異形成を予防する効果が示されています。
 - **4価HPVワクチン(ガーダシル®)**
HPV16/18型の感染とそれによる子宮頸部異形成を予防するとともに、HPV6/11型の感染とそれによる尖圭コンジローマも予防することが示されています。
- HPVワクチン接種により自然感染で獲得する数倍量の抗体を、少なくとも12年維持することが海外の臨床試験により明らかになっています。
- HPVワクチン接種で予防されない型のHPVによる子宮頸がんも一部存在します。HPVワクチンの接種歴にかかわらず、**子宮頸がん検診を定期的に受けるよう、説明・助言してください**

③ HPVワクチンのリスク(安全性) 詳しくはこちらへ https://www.mhlw.go.jp/content/000892337.pdf



- 一定の頻度で発生する副反応については、ワクチンの添付文書をご参照ください。
- ワクチン接種後の症状として頻度の高いものは、接種部位の疼痛です。

発生頻度	シルガード*9(9価HPVワクチン)
50%以上	疼痛*
10～50%未満	腫脹*、紅斑*、頭痛
1～10%未満	浮動性めまい、悪心、下痢、そう痒感*、発熱、疲労、内出血*等
1%未満	嘔吐、腹痛、筋肉痛、関節痛、出血*、血腫*、倦怠感、硬結*等
頻度不明	感覚鈍麻、失神、四肢痛

シルガード*9添付文書(第3版)より改編

*接種した部位の症状

- 頻度は不明ですが、重篤な副反応も報告されています。アナフィラキシー(蕁麻疹、呼吸器症状などを呈する重いアレルギー)、ギラン・バレー症候群(脱力などを呈する末梢神経の疾患)、急性散在性脳脊髄炎(頭痛、嘔吐、意識障害などを呈する中枢神経の疾患)、免疫性血小板減少症(紫斑、鼻出血、口腔粘膜出血)など

■ 疼痛または運動障害などの報告について

- HPVワクチン接種直後から、あるいは遅れて、広い範囲に広がる痛みや、手足の動かしにくさ、不随意運動などを中心とする多様な症状が現れたことが副反応疑い報告により報告されています。
- この症状のメカニズムとして、①神経学的疾患、②中毒、③免疫反応、④機能的な身体症状(下記「機能的な身体症状とは」参照)が考えられましたが、①②③では説明できず、④機能的な身体症状であると考えられています。
- 「HPVワクチン接種後の局所の疼痛や不安などが機能的な身体症状を惹起したきっかけになったことは否定できないが、接種後1か月以上経過してから発症している症例は、接種との因果関係を疑う根拠に乏しい」と評価されています。
- HPVワクチン接種歴のない方においても、HPVワクチン接種後に報告されている症状と同様の「多様な症状」を有する方が一定数存在したことが明らかとなっています。
- このような「多様な症状」の報告を受け、様々な調査研究が行われていますが、「ワクチン接種との因果関係がある」という証明はされていません。

【機能的な身体症状とは】

- 何らかの身体症状はあるものの、画像検査や血液検査を受けた結果、その症状に合致する異常所見が見つからないことがあります。このような状態を、機能的な身体症状と呼んでいます。
 - 症状としては、①知覚に関する症状(頭や腰、関節などの痛み、感覚が鈍い、しびれる、光に対する過敏など)、②運動に関する症状(脱力、歩行困難、不随意運動など)、③自律神経などに関する症状(倦怠感、めまい、嘔気、睡眠障害、月経異常など)、④認知機能に関する症状(記憶障害、学習意欲の低下、計算障害、集中力の低下など)など多岐にわたります。
 - 痛みについては、特定の部位からそれ以外の部位に広がることもあります。運動障害などについても診察所見と実際の運動との乖離、症状の変動性、注意がそれた場合の所見の変化など、機能的に特有の所見が見られる場合があります。
 - 臨床現場では、専門分野の違い、病態のとらえ方の違いあるいは主たる症状の違いなどにより、様々な傷病名で診療が行われています。また一般的に認められたものではありませんが、病因に関する仮説に基づいた新しい傷病名がつけられている場合もあります。
- 例：身体症状症、変換症/ 転換性障害(機能的な神経症状症)、線維筋痛症、慢性疲労症候群、起立性調節障害、複合性局所疼痛症候群(complex regional pain syndrome: CRPS)

4 HPVワクチンの接種

- 定期接種対象者 小学校6年～高校1年相当の女子
- 定期接種対象ワクチン 9価(シルガード®9)

一般的な接種スケジュール



1年以内に接種を終えることが望ましいとされています。

※1 1回目と2回目の接種は、少なくとも5か月以上あけます。5か月未満である場合、3回目の接種が必要になります。

※2・3 2回目と3回目の接種がそれぞれ1回目の2か月後と6か月後にできない場合、2回目は1回目から1か月以上（※2）、3回目は2回目から3か月以上（※3）あけます。



接種時の注意点

- 痛みなどの頻度が高いワクチンであることを被接種者と保護者に伝えてください。
- 接種の痛みや緊張のために、血管迷走神経反射が出現し、失神することがあります。接種後は**少なくとも30分間**は背もたれのある椅子に座っていただき、座位で様子を見てください。前に倒れる場合がありますので、注意して様子を観察してください。

接種を判断する際のポイント

- ワクチンを接種した後や、けがの後などに原因不明の痛みが続いたことがある方は「機能的身体症状」が出現する可能性が高いと考えられているため、被接種者と保護者に十分確認してください。
- 接種後に現れた症状により、以降の接種を中止もしくは延期することが可能です。2回目以降の接種時には、前回接種後の症状の有無を被接種者と保護者に確認してください。

2価・4価HPVワクチンと9価HPVワクチンとの交接種について

- HPVワクチンの接種は、原則、同じ種類のワクチンで実施します。しかしながら、2価または4価HPVワクチンで規定の回数の一部を完了し、9価HPVワクチンで残りの回数の接種を行う交接種についても、実施して差し支えないこととしています。
- 世界保健機関（WHO）や諸外国の保健機関においても、基本的には同じ種類のワクチンでの接種が推奨されています。しかしながら、やむを得ない場合には、交接種も許容されています。また、現時点において、交接種における免疫原性や安全性に関する懸念は報告されていません。
- 接種にあたっては、被接種者と保護者に対し、十分な説明を行った上で実施してください。
- なお、2価または4価HPVワクチンで接種を開始し、定期接種として9価HPVワクチンで接種を完了する場合は、9価HPVワクチンの接種方法に合わせ、1回目と2回目の間隔を1か月以上、2回目と3回目の間隔を3か月以上空けて接種します。

参考資料はこちら

<https://www.mhlw.go.jp/content/000892337.pdf>



5 接種後に体調の変化などを訴える方が受診した場合の対応

- ワクチン接種直後から、あるいは遅れて接種部位や接種部位と異なる部位の持続的な痛み、倦怠感、運動障害、記憶など認知機能の異常、その他の体調の変化などを訴える患者が受診した場合には、**HPVワクチン接種との関連を疑い症状を訴える患者が存在することを念頭に置き、傾聴の態度（受容、共感）を持って接し、共感を表明しつつ、診療にあたってください。**
- 患者が落ち着いて診療を受けられるよう、また治療方針が首尾一貫するように取りはからいつつ、自分が主治医として診療するか、協力医療機関、専門医療機関の医師に紹介するかを検討してください。患者の行き場が無くなる状況とならないように、紹介する際も、主治医が決定するまでは責任を持ってご自身で診療にあたってください。
- 副反応疑い報告を行うか検討してください。（参照）日本医師会・日本医学会発刊「HPV ワクチン接種後に生じた症状に対する診療の手引き」
www.mhlw.go.jp/bunya/kenkou/kekkaku-kansenshou28/dl/yobou150819-2.pdf
- HPVワクチン接種後に生じた症状について、患者により身近な地域で適切な診療を提供するため、各都道府県において協力医療機関が選定されています。

HPV ワクチン接種後に生じた症状の診療に係る協力医療機関

https://www.mhlw.go.jp/bunya/kenkou/kekkaku-kansenshou28/medical_institution/index.html



被接種者が接種後に生じた症状で困ったときの相談窓口（都道府県ごとに設置）

<https://www.mhlw.go.jp/bunya/kenkou/kekkaku-kansenshou28/madoguchi/index.html>



Q&A

Q：副反応疑い報告とは何ですか？

- A：**●ワクチン接種による副反応が疑われる症例については、ワクチン接種との因果関係を問わず、報告を集めています。詳しくは、厚生労働省ホームページ「予防接種法に基づく医師等の報告のお願い」をご参照ください。
https://www.mhlw.go.jp/bunya/kenkou/kekkaku-kansenshou20/hukuhannou_houkoku/index.html
- 令和7(2025)年9月末までに報告^{※1}されたHPVワクチンの副反応疑いの総報告数は、シルガード[®]9で875人(1万人あたり約4人^{※2})です。このうち、報告した医師や企業が重篤と判断した人は接種1万人あたり約2人です。^{※2、※3、※4}
うち医師または企業が重篤と判断した報告数は、105人(1万人あたり約2人^{※2})です^{※3}。
 - 接種との因果関係を問わず、接種後に起こった健康状態の異常について副反応疑いとして報告された症例については、厚生労働省の審議会において、報告頻度や症例の概要などを確認し、安全性に係る定期的な評価を継続的に実施しています^{※6}。

※1 企業報告は販売開始から、医療機関報告は平成22(2010)年11月26日からの報告

※2 出荷数量より推計した接種者数422万人(サーバリックス[®]242万人、ガーダシル[®]180万人)を分母として1万人あたりの頻度を算出

※3 出荷数量より推計した接種者数245.9万人を分母として1万人あたりの頻度を算出

※4 2025年度まで定期接種に用いていた2価または4価ワクチン(サーバリックス[®]またはガーダシル[®])は1万人あたり9人です。

このうち報告した医師が企業が重篤と判断した人は、接種1万人あたり約5人です。

※5 ワクチン接種に伴って一般的に起こりうる過敏症など機能性身体症状以外の認定者も含んだ人数

※6 審議会における議論の詳細については https://www.mhlw.go.jp/stf/shingi/shingi-kousei_284075.html に掲載

Q：予防接種健康被害救済制度とは何ですか？

- A：**●予防接種の副反応による健康被害は、極めて稀ですが、不可避免的に生じるものですので、接種に係る過失の有無にかかわらず、予防接種と健康被害との因果関係が認定された方を迅速に救済する制度を設けています。詳しくは厚生労働省ホームページ「予防接種健康被害救済制度について」をご参照ください。
https://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/vaccine_kenkouhigaikyusai.html
- 日本の従来からの救済制度の基本的な考え方「厳密な医学的な因果関係までは必要とせず、接種後の症状が予防接種によって起こることを否定できない場合も救済の対象とする」に沿って、救済の審査を実施しています。
 - 令和7(2025)年3月末までにHPVワクチン接種との因果関係が否定できないとして救済制度の対象となった方は、審査された636人中、384人です。(予防接種法に基づく救済の対象者が、審査した計96人中、63人、PMDA法に基づく救済の対象者が、審査した計540人中、321人となっています。)

お役立ち資料集

厚生労働省「ヒトパピローマウイルス感染症～子宮頸がんとHPVワクチン～」

HPV ワクチンに関する情報を一元的にお知らせしています。
www.mhlw.go.jp/bunya/kenkou/kekkaku-kansenshou28/index.html



厚生労働省「予防接種・ワクチン情報」

HPV ワクチンを含む、予防接種法に基づいて行われる各ワクチンの定期接種に関する情報をお知らせしています。
www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/kenkou_iryuu/kenkou/kekkaku-kansenshou/yobou-sesshu/index.html



厚生労働省「厚生科学審議会 予防接種・ワクチン分科会 副反応検討部会」

HPV ワクチンを含む各ワクチンの安全性の評価などを定期的に行っている審議会です。
www.mhlw.go.jp/stf/shingi/shingi-kousei_284075.html



筋肉内注射の注意とポイント(動画)

HPV ワクチンと同じく筋肉内注射である、新型コロナウイルス接種を安全に行うためのポイントを説明しています。
(厚生労働行政推進調査事業費補助金「新興・再興感染症及び予防接種政策推進研究事業」「ワクチンの有効性・安全性と効果的適用に関する疫学研究」)
www.youtube.com/watch?v=rcEVMi20tCY



接種対象者とその保護者向けのリーフレットを
厚生労働省ホームページからダウンロードしてお使いいただけます。

厚生省 HPV

検索



今だからこそ予防できる“がん”があります



どのくらいの方が子宮頸がんになるの？

- 日本では毎年、約1.1万人の女性が子宮頸がんにかかり、毎年、約3,000人の女性が子宮頸がんできちんと亡くなっています。
- 患者さんは20歳代から増え始めて、30歳代までのがんの治療で子宮を失ってしまう(妊娠できなくなってしまう)人も、1年間に約1,000人います。

出典：国立がん研究センターがん情報サービス2021年全国推計値に基づく累積罹患リスク、2024年累積死亡リスク、2024年人口動態統計がんと死亡データより

HPVワクチンの一般的な接種スケジュール

日本では、小学校6年～高校1年相当の女の子を対象に、子宮頸がんの原因となるHPVの感染を防ぐワクチン（HPVワクチン）の接種を提供しています。



※1 1回目と2回目の接種は、少なくとも5か月以上あけます。5か月未満である場合、3回目の接種が必要になります。

※2-3 2回目と3回目の接種がそれぞれ1回目の2か月後と6か月後に行えない場合、2回目は1回目から1か月以上（※2）、3回目は2回目から3か月以上（※3）あけます。

子宮頸がんできちんとしないためにできることは？

ポイント①

HPVワクチンで
HPVの感染を予防



ポイント②

子宮頸がん検診で
がんを早く見つけて治療

ワクチンを接種していても、していなくても、
20歳になったら子宮頸がん検診を必ず定期的に受けてください

公費でHPVワクチンを接種できる対象者は？

小学校6年～高校1年相当の女性

HPVワクチンについて、もっと詳しく知りたい方は厚生労働省のホームページをご覧ください。

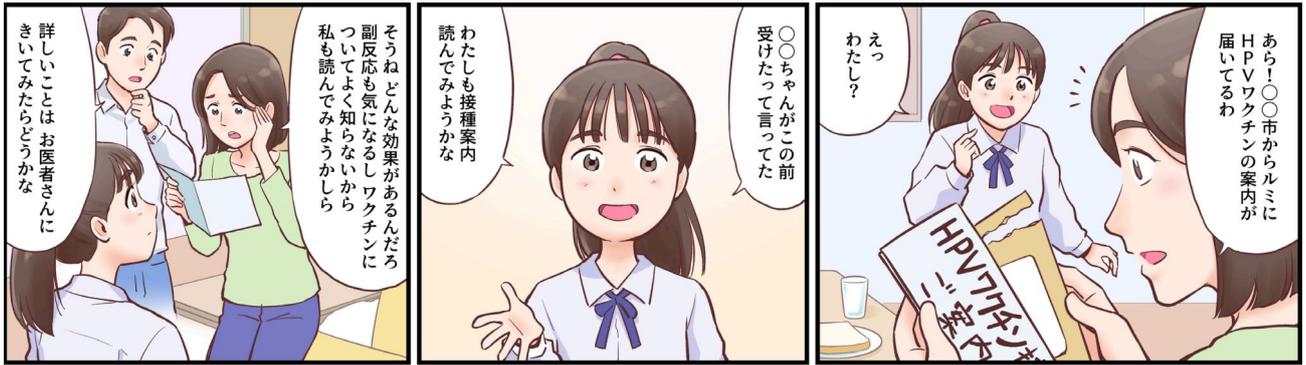


厚生労働省 HPV

HPVワクチンに関するよくあるご質問(Q&A)については、こちらをご確認ください。



今だからこそ予防できる“がん”があります



どのくらいの方が子宮頸がんになるの？

- 日本では毎年、約1.1万人の女性が子宮頸がんにかかり、毎年、約3,000人の女性が子宮頸がんで亡くなっています。
- 患者さんは20歳代から増え始めて、30歳代までにがんの治療で子宮を失ってしまう(妊娠できなくなってしまう)人も、1年間に約1,000人います。

出典：国立がん研究センターがん情報サービス2021年全国推計値に基づく累積罹患リスク、2024年累積死亡リスク、2024年人口動態統計がん死亡データより

HPVワクチンの一般的な接種スケジュール

日本では、小学校6年～高校1年相当の女の子を対象に、子宮頸がんの原因となる HPV の感染を防ぐワクチン(HPVワクチン)の接種を提供しています。



子宮頸がんを苦しめないためにできることは？

ポイント① HPVワクチンでHPVの感染を予防



ポイント② 子宮頸がん検診でがんを早く見つけて治療

ワクチンを接種していても、してなくても、20歳になったら子宮頸がん検診を必ず、定期的に受けてください。

公費でHPVワクチンを接種できる対象者は？

小学校6年～高校1年相当の女性

HPVワクチンについて、もっと詳しく知りたい方は厚生労働省のホームページをご覧ください。



厚生労働省 HPV

HPVワクチンに関するよくあるご質問(Q&A)については、こちらをご確認ください。



今だからこそ予防できる“がん”があります

どのくらいの人子宮頸がんになるの？

- 日本では毎年、約1.1万人の女性が子宮頸がんにかかり、毎年、約3,000人の女性が子宮頸がん亡くなっています。
- 患者さんは20歳代から増え始めて、30歳代までにがんの治療で子宮を失ってしまう(妊娠できなくなってしまう)人も、1年間に約1,000人います。

出典：国立がん研究センターがん情報サービス2021年全国推計値に基づく累積罹患リスク、2024年累積死亡リスク、2024年人口動態統計がん死亡データより

HPVワクチンの一般的な接種スケジュール

日本では、小学校6年～高校1年相当の女の子を対象に、子宮頸がんの原因となるHPVの感染を防ぐワクチン(HPVワクチン)の接種を提供しています。



※1 1回目と2回目の接種は、少なくとも6か月以上あけます。5か月未満である場合、3回目の接種が必要です。
※2 2回目と3回目の接種はそれぞれ1回目の2か月後と6か月後に受ける場合、2回目は1回目から1年以上、3回目は2回目から3か月以上(※3)あけます。

子宮頸がんを苦しめないためにできることは？

ポイント ① HPVワクチンでHPVの感染を予防



ポイント ② 子宮頸がん検診でがんを早く見つけて治療

ワクチンを接種していても、していなくても、20歳になったら子宮頸がん検診を必ず、定期的を受けてください。

公費でHPVワクチンを接種できる対象者は？

小学校6年～高校1年相当の女性

HPVワクチンについて、もっと詳しく知りたい方は厚生労働省のホームページをご覧ください。



厚生労働省 HPV

HPVワクチンに関するよくあるご質問(Q&A)については、こちらをご確認ください。

